



② 柵家と俵屋(つばどめ・駒寄の設置年代は不詳、中京区)  
柵家の敷地を囲む塀の前に駒寄が、俵屋の前にはつばどめがはりめぐらされている。塀への接近・接触を阻止すること以外に機能らしいものは無い。人の進入を拒みつつ、同時に格式を高めるデザインでもある。

①『三条油小路町並絵巻』(1820年、京都府立総合資料館所蔵)  
管見の限り犬矢来を確認できた最古の図。描かれた町家の大半が大小の犬矢来を備えている。ほとんどが直線状の犬矢来であり、(つばどめ→犬矢来)という変化を想像させる。現在ポピュラーな曲面のものはない。

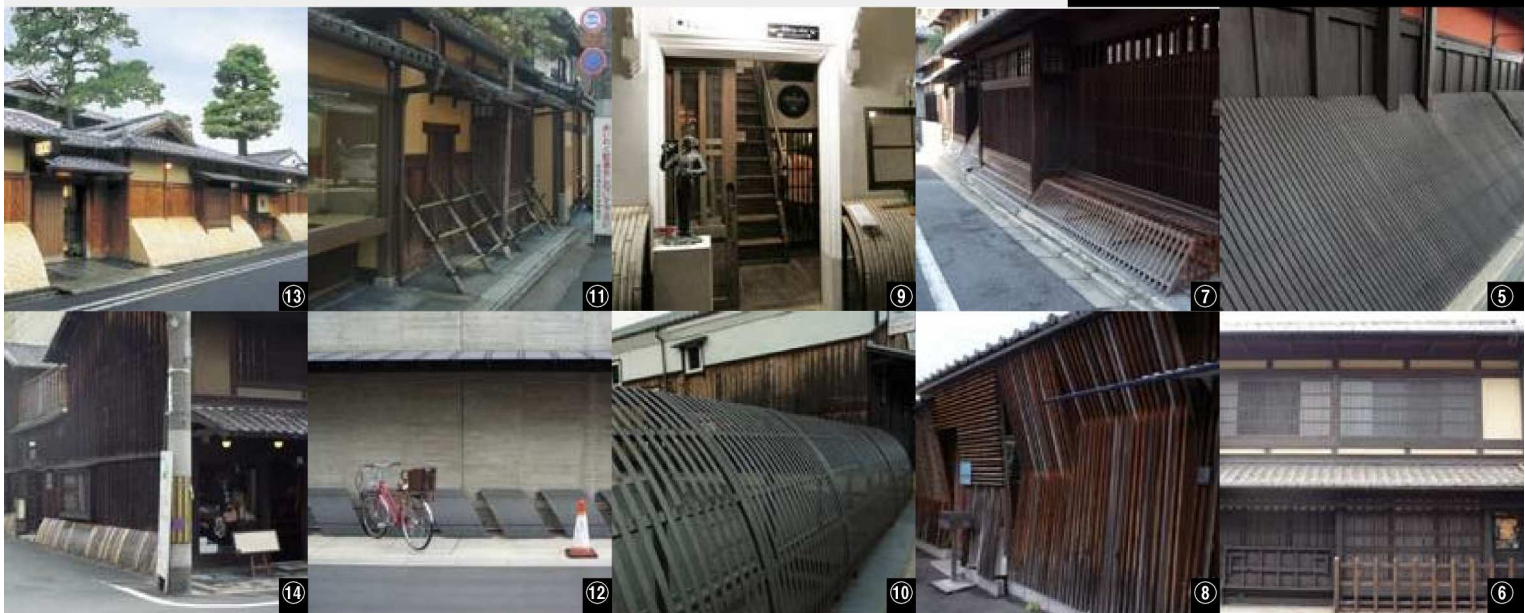
### 【京都絶対領域】

「京都らしい」建築を分かり易く構成する要素、庇・格子・坪庭などなど…。これらの要素を建築に採用することで、安易に「京都らしさ」を獲得した気になってはいないだろうか。あるいは逆に必要以上に忌避してはいないだろうか。そもそも格子とは何であろうか？ 京都の庇とはいかにあるべきか？ 京都だから…条例にあるから…という思考停止に陥る前に、これらの要素の意味と可能性を一つずつ、有名無名問わず具体的な建築を参照しながら、あらためて検討してみたい。

# 犬矢来

## 駒寄・つばどめ

### 京都絶対領域<sup>4</sup>







④紫野和久傳 (1995年、北区)

大徳寺に面した石張りの外壁面。犬矢来をほのかに連想させる、裾広がりの形状が、地面と建物をやわらかに繋げている。犬矢来とは建物と地面の関係のデザインでもある。その前に横たえられた進入防止サインの丸太は蛇足か。



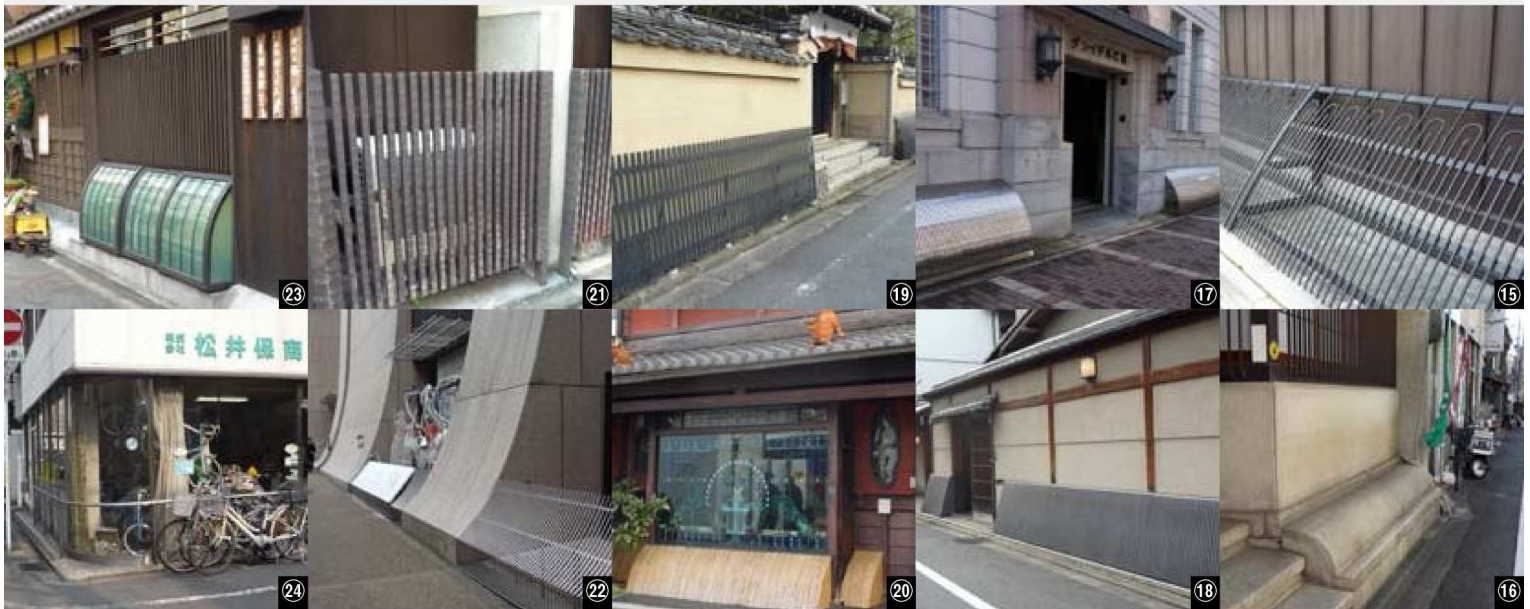
③壬生寺阿弥陀堂 (2003年、中京区)

木とガラスでつくられた斜めの外壁は地下の資料室に光を落とすトップライトとなっている。犬矢来のデザインをモチーフとしたものだろうが、そう考えると手前にフェンスが立てられてしまっているのが惜しい。

### 【犬矢来・駒寄・つばどめ】

今回は「犬矢来」「駒寄」「つばどめ」といった、京都の家と街路の境界付近に設けられる要素に注目する。いずれも一種の仮設柵であり、街路沿いの壁際に設けられる。

そもそも「矢来」とは、竹や丸太を粗く組み合わせ柵や垣としたものを言う。矢来は「遣らひ」であり、「入るのを防ぐ」の意である。矢来の原形に近いのは、粗く組んだ丸竹を立てかけただけの「つばどめ」であろう(①)。丸竹を割竹にして密に組みあげると「犬矢来」になる。曲面形状のものが今日では一般的だ(⑬)。つばどめが自立し固定されると「駒寄」である(⑥)。



## 犬矢来の起源

現在、犬矢来や駒寄等は「京都らしさ」を色濃く演出する要素として認知されている。直線的デザインの多い京都の街にあって、曲線を描く犬矢来の姿は特異であるが、それが街に並ぶ様子を多くの人が好意的に感じているようである。とりわけ店舗や飲食店における犬矢来設置率は、新旧問わず高い。では、そんな犬矢来はいつ頃生まれたのだろうか。京町家に関する書籍や研究をあたって、犬矢来の起源について論じたものは管見の限り無い。そこで絵図資料の中に犬矢来の姿を追ってみた。

まず、室町〜江戸初期の「洛中洛外図」に犬矢来や駒寄は全く見られない。町家の一階は粗い台格子が嵌められているか、見世棚の広がる開放的なつくりである。江戸中期の眼鏡絵（18世紀中頃）や都名所図会（1780）に描かれる街並みも同様である。ところが江戸後期の「三条油小路町並絵巻」①では大半の町家が犬矢来を備えており、千本格子や虫籠窓・揚見世（はつたり床几）とともに、町家を構成する定型の要素となっている。ほとんどが直線状の犬矢来であり、つばどめとの差は曖昧である。台形のものも若干あるが、今日ポピュラーな曲面のものは見あたらない。「花洛名勝図会」（1864）では八坂神社門前に犬矢来のある町家が1軒確認できる。明治期の写真を見ると、四条通などの大通りには揚見世の並ぶ開放的な町家が連なる一方で、仕舞屋造の町家が並ぶ小路では駒寄が目立ち、犬矢来は比較的少ない。このように絵図史料を一瞥した限り、犬矢来の出現は江戸後期までしか遡ることはできない。また三条や四条といった繁華な



物に進入するなら正面より側面や裏から容易だろうが、犬矢来は玄関のある正面に優先的に設けられ、側面や裏路地側に設けられない事例が少なからずあるからだ。

そこで思いつのが「犬遣らい」ならぬ「人遣らい」としての役割である。犬矢来を格子の前に設けることで、往来の人が格子に近づかないようにするのである。外から内を見通せない格子も実際に近寄れば用をなさないのである。もちろん犬矢来は格子への接近を物理的に阻止できるわけではない。あくまで心理的な効果である。「近づくな」というサインと言いつつ換えてもよい。そもそも町家の軒下は「公」の街路と「私」の建物をつなぐ曖昧な中間領域であり、商売を営む町家の軒下は基本的に公に開放されていた。そこを敢えて塞いで進入を拒んでいるのが犬矢来である。この「中間領域

## 犬矢来の現在

では、敷地境界が明確になり、外壁の材料が多様化した現代、犬矢来にはどのような役割が期待されているのだろうか。具体的な事例を挙げながらみていきたい。

### ■外壁保護への特化

犬の小便や泥はねから外壁を保護する目的であれば、タイルやコンクリートで腰壁を覆ってしまえば容易に事足りる。実際そのような事例はよく見かける②⑦。現代京都において泥以上に外壁を脅かすのは、狭小街路を歩き交う車や自転車である。それらへの防御には昔ながらの犬矢来や駒寄では頼りなく、より頑丈な塀や柵が必要となる②④②⑧。機能面から見れば、これらは明らかに現代の犬矢来であり駒寄である（こうした柵に自転車を括り付けた姿もよく見かける）。



### ■新機能

現代的な要求への対応も犬矢来には期待されている。旧来の犬矢来の中に照明を仕込む例はしばしば目にする。姉小路間之町の飲食店②③では犬矢来がモチーフであるろう突起物が外壁についているが、これもおそらく照明であろう。壬生寺阿弥陀堂③では逆に、地下へ光を供給するトップライトが直線状の犬矢来として大胆にデザインされている。石堀小路にある飲食店⑨や伏見の酒蔵⑩では、門扉となつたスライド式犬矢来を見ることができ、「拒む犬矢来」の系譜としては正統と言えるようか。龍谷ミュージアム⑫では駐輪場の自転車固定台が犬矢来となつている。

これら現代犬矢来の多くに共通するのは、従来の犬矢来とは関係のない現代的な要求に対し、主として形態的連想から犬矢来のデザインを採用することで、「京都らしさ」をも表現しようという意図である。機能はいずれも明瞭である。このような場合、形態が犬矢来である必然性が薄いと、単なる引用的デザインとして回収される危険性が高い。犬矢来のデザインの洗練、つまり装置でありつつも機能が不明瞭というデザインの可能性は、現代に活かされてもよいと思う。

## 犬矢来の可能性

犬矢来・駒寄・つばどめの本質は「人遣らい」である、というのが本稿の一つの結論である。しかし料亭の犬矢来は、人の進入を拒んでいる一方で、客人を迎えているようにも感じられる。穏やかに拒みつつ選択的に迎え入れることは「格式」のデザインの肝であろう。犬矢来の基本的機能は、



通り沿いの町家は、明治以降まで揚見世を広げた開放的な構えが一般的であり、犬矢来や駒寄が設けられることは少なかったようだ。犬矢来は主にメインストリートからやや内に入った小路において、18世紀後半〜19世紀前半に普及したようである。この時代には町家の仕舞屋化、すなわち台格子や揚見世による開放的な店構えから格子戸を建て込んだ閉鎖的な構えへの変化が急速に進んだことが指摘されている。犬矢来や駒寄・つばどめなどの装置は、この仕舞屋化の一環として町家に備えられたと推測される。

## 犬矢来の役割

犬矢来は何のためにあるのか。よく耳にするのは、犬矢来は「犬遣らい」だから犬（糞尿）除け、という説だ。より一般的に道からの泥跳ねや雨しぶきから外壁を保護するためとも言われる。木造建築において建物の足元を水気から守ることは、もとより重要な課題である。大正時代の壬生屯所跡の写真には、泥跳ね除けと思われる板状の犬矢来が見られる（25）。「京都維新史跡写真帖」京都大学附属図書館所蔵。しかし、本当に外壁保護のためであれば、犬矢来は軒の出の小さい妻側にこそ設置されるべきであるが（26）雨跳ねで足元が傷んだ妻壁、実際に角地に建つ建物を見てみると、平側のみ犬矢来が置かれている事例が圧倒的に多い。また雨も犬の小便も到底防げないようなスカスカの犬矢来も散見される（15）。

犬矢来は防犯装置である（曲面形状と竹の滑らかさゆえに泥棒の足がかりになりにくい）という説もあるが、やや怪しい。建

の占有」こそが、犬矢来の本質的な役割ではないだろうか。この考えは、町家が閉鎖的になる仕舞屋化と並行して犬矢来が登場したという推測や、妻側ではなく庇のある平側にもつばら犬矢来が設けられている事実とも符合する。妻側には格子も中間領域もないのだから。実際に、犬矢来が広く普及したのは、明治期に軒下の土地が民有地とされた以降であるという。

つばどめと駒寄についても同様のことが言えよう。駒寄は馬をつなぐためというが、それなら棒を2、3本掘って立てておけばよい。馬をつなぐことに使われたということであり、そのために設けられたわけではないだろう。つばどめは進入を防ぐ柵そのものである。

人遣らいとしての犬矢来や駒寄の存在は、訪問者に対する心理的な敷居を上げる。それは翻って、建物の格式を高めることに効果的である。由緒ある旅館や料亭は、一般の町家のように街路に開かず、塀で閉ざされ更に犬矢来の類が設けられていることが多い（13）。

以上のように犬矢来の役割には諸説があり、さらに他説が推測されうる。その役割は複数であるかもしれないし、建物種や時代によって異なりもしたであろう。ともあれ犬矢来は何かしらの機能をもつ装置である（と皆が感じている）。しかし、犬矢来の姿形からそれを読み取ることは難しい。装置であるにもかかわらず不明瞭な形態と機能の関係。それゆえに犬矢来は人々の関心を惹くのではないか。それはデザインの洗練の一つの到達点であり、犬矢来の魅力の一端を担っているように思われる。

## シンボル

境界明示の役割はし字側溝にとつてかわられたが、敷居を上げ格式を高める犬矢来の役割は現代においても有効である。また「京都らしい」イメージの獲得も期待しよう。紫野和久傳（4）の外壁設置部は裾広がり形態となつているが、これは外壁保護機能があるわけでもなければ、直接的に犬矢来のデザインを用いているわけでもない。しかし、犬矢来がもつ格式を高める効果と控え目なシンボルとしての作用は、老舗料亭という店舗イメージと重なって非常に有効に機能しているように思われる。16のような石の犬矢来も同様である。材料という面では、鉄製の犬矢来もよく見かける（17）、（18）。

## 設備の隠蔽

京都の街並みを考える際、メーターや室外機など建物外部に露出しがちな各種設備機器は悩ましい存在である。それらの隠蔽に犬矢来が活用される。竹の間隔が広めの犬矢来の中にエアコン室外機を納める事例は、機器効率に支障がありそうではあるが、よくある。29は内部に大型の設備機器を納めている。点検用の開閉扉が設けられているため、通常時の外観は普通の犬矢来に近い。24はエアコン室外機を隠すために、駒寄というには小さすぎるピッチとスケールとなつているが、名栗仕上げがかるうじて駒寄であることを主張している。



29

人にせよ犬にせよ「拒む」ことにあるが、一般に拒絶する装置というのは、見て気持ちのいいものではないことが多い。防犯カメララシかり忍び返しや有刺線線しかり。それにもかかわらず犬矢来は、多くの人に好意的に受けとめられている。その事実こそ、犬矢来のデザインについて特筆されるべき点であろう。人の接近や出入りを不快感を感じさせず（むしろ自発的に）制御するデザインとして評価すれば、現代においても町家に限定されない発展的な可能性が見いだせよう。そのためには「犬遣らい」などと取り替わず、これは「人遣らい」であると自覚することがまずは必要である。

もう一つの可能性は「迎える」犬矢来である。犬矢来は町家の閉鎖化の一環として軒下の中間領域への立ち入りを「拒み」、街から距離をとるために生まれた。しかし「町家店舗」が一般化した今日、町家は再び街に開きはじめていく。犬矢来は拒む姿勢を解除し、逆に中間領域に人を迎え入れるストリートファニーニチャーとして形を変えてもよいのではないか。単純に犬矢来の表面曲率が反転すればベンチとなる。中間領域にはもう一つ忘れ去られた遺物的装置「ばったり床几」があるが、ばったり床几と犬矢来の再生的融合は一つの方向性であるかもしれない。

究建築研究室  
柳沢 究

魚谷繁礼建築研究所  
魚谷繁礼

池井健建築設計事務所  
池井 健